韓国蔚山地域の農村集落における祭祀空間の構成に関する研究

A STUDY ON THE CONSTITUTION OF THE PLACES FOR RITUALS
IN RURAL VILLAGES LOCATED IN ULSAN, KOREA

姜 恵 京*, 西村 一 朗**, 韓 三 建***

Hyekyung KANG, Ichiro NISHIMURA and Samgeon HAN

This is a research study about the location of special places for rituals in villages in Ulsan, Korea.

Upon researching 289 villages in Ulsan, Korea, we have found that 88 percent of these villages have two or more special sites for rituals. The primary category types for rituals can be characterized as "Dangmok" and "Jedang". We have found a total of six types of places for rituals.

The most popular ritual sites in Ulsan, Korea are either those exhibiting only a "Dangmok" style, or, those exhibiting both a "Dangmok" style and a "Jedang" style. There are no places for rituals in some villages, such as Won village and in some commercial villages. These villages were unique cases from long ago.

In cases where places for rituals have disappeared altogether in communities — we have found that the cause was a lack of understanding about the historical significance of these ritual sites.

keywords : the places for rituals, Ulsan, Dangmok, Jedang

祭祀空間、蔚山、堂木、祭堂

1. 研究の背景と目的

韓国の伝統的な住居集落は今世紀に入って外部的な要因と内部的な要因によって大きく変化し始めた。まず、今世紀初頭の植民地支配による異文化の影響によって大々的な変容を重ねた上、さらに朝鮮動乱によって壊滅的な被害を受けた。このことは建物や施設の被害のみならず、韓国国民の生活全般にわたって大きな変容を及ぼした。特にこれらの外部的な要因によって都市社会及び都市における住居集落は大きく変わり、伝統的なコミュニティや人間関係は崩壊してきた。

しかし、同様の変化や被害を受けながらも農村部は都市部に比べればその変化の程度は相対的に軽く、韓国の伝統的なものが色強く残されてきた。特に農村部における住居集落では共同性の高い生活を維持している。その中でも集落の平和と安全及び豊作のために行われた祭祀¹⁾は集落にある種の秩序を与えてきたものである。これは集落という地域共同体が儀式信仰の基本単位になることに伴って、集落民の参加意識を強くしている。

また、祭祀（洞祭）だけではなく、洞祭を行う前後に集落会議及び農楽²⁾などを行うことで、集落住民同士の親睦を深めたり、結束感を

与える機能をも持っていた。このような性格をもつ洞祭が行われる祭祀空間は、集落の重要なコミュニティ空間として存在しながら集落住民同士の求心的な役割を果たす韓国集落の一つの特徴的な存在と言えよう。

このような集落の祭祀及び祭祀空間を対象とする調査は植民地時代の日本人学者によって始められ³⁾、人類学、社会学、建築学などの各分野で続けられている。しかし、これらの研究の視点は祭祀の儀式そのものに留まっており、祭祀空間である祭堂及び堂木⁴⁾に関する研究はあまり見当たらない。また、研究対象を1カ所の集落に限定して行ったものが多いため、集落での祭祀空間の全体的な傾向がつかみにくい。

そこで、本研究では集落の重要な空間要素として存在してきた祭祀空間の構成を考察するため、このような祭祀空間が多く存在している韓国・蔚山（ウルサン）地域の伝統的な農村集落をとりあげ調査研究を行った。特にこの地域は朝鮮動乱の直接的な被害を受けていないため、集落の物理的構造や形態はもちろん、住民の構成などにも変化が少なく、本研究に最も適した地域と判断できる。本論文では、集落住民の生活と関連して発生し、伝統的に継承してきた祭祀

* 奈良女子大学人間文化研究科 大学院生・家修

** 奈良女子大学生生活環境学部 教授・工博

*** 蔚山大学建築学部 助教授・工博

Graduate Division of Human Culture, Nara Women's Univ., H. Home Eco.
Prof., Division of Human Environment, Nara Women's Univ., Dr. Eng.
Assistant Prof., School of Architecture, University of Ulsan, Dr. Eng.

空間の形態や構成を明らかにすることを目的とする。それによって歴史的環境や地域文化に調和した集落空間構成の特性を明らかにするのに寄与できるものと判断する。

2. 調査の概要

本研究では祭祀空間の構成を明らかにするために祭祀空間に関する文献調査⁵⁾と実態調査を行った。文献調査によって祭祀空間が全国の集落に存在していることが分かった。それで、祭祀空間が集落の共同空間として活発に機能している地域の1つを選び、実態調査を行った。

(1) 調査対象地域および範囲：本研究の調査対象地域の範囲は“郡”という行政区域⁶⁾にした。韓国で郡は一つの地域コミュニティとしての生活領域であり、郡は生活及び風習の境界線ともいえる。このような一つのまとまった地域性をもつ郡に属するすべての集落を調査することによって集落の祭祀空間の全体的な傾向をつかむことが可能になる。そういうわけで一つの郡を調査対象範囲とし、慶尚南道の蔚山郡を選び、調査を行った⁷⁾ (図1)。

蔚山郡は蔚山市を取り囲む地域で都市開発の波からも逃れ伝統的な集落の形を維持している所である。蔚山郡には14の行政単位(邑3, 面11)に325カ所の集落がある。今回の調査ではその内1990年以降に新しく開発され集合住宅団地となった36カ所を除き、伝統性を有する289カ所の集落を調査対象地域とした。

(2) 調査概要：まず予備調査では、各村の里長を対象としたアンケート調査と文献調査を行い、祭祀空間の有無を調べた。調査対象集落289カ所の内、254カ所の集落に祭祀空間の存在が確認できた(図2)。1995年8月から1998年1月までの本調査では、祭祀空間が存在している集落に対して、祭祀空間の構成要素、構造、規模などを実測し、立地的要素を調査した。一方、祭祀空間が存在していない集落に対してはその理由を探り明らかにした。

図1 調査地域の位置

3. 祭祀空間の概要

(1) 祭祀空間の定義

1) 祭祀とは神々や祖先などをまつる儀式であり、それを行う場所が祭祀空間である。集落の祭祀である洞祭を行う空間を集落の祭祀空間と定義する。

2) 集落には一つ、または二つ以上の祭祀空間が設けられている。それは普通、木造建物と大きな木で構成されている。木は、ダンスナム(堂木)⁸⁾と呼ばれている生きた樹木とザンスン(長生)⁹⁾と呼ばれている木の彫刻に分けられる。建物はゼダン(祭堂)¹⁰⁾と呼ばれている主屋と附属舎に分けられる。また、これ以外にも祭祀空間の構成要素として岩または石積みがある。

(2) 祭祀空間の分類

祭祀空間は、一つまたは一つ以上の構成要素の組み合わせでそれぞれ構成され、表1のように6つのタイプに分類できる。

(3) 祭祀空間の構成要素

1) 堂木(ダンスナム)

一般的に堂木は、樹齢の古い老巨樹で構成された集落のシンボリックな存在である。集落の祭祀の対象となることから神木と呼ばれる場合もある。樹木の中でケヤキ、エノキ、銀杏が三大神木であり、これらは葉の形から農事の豊凶を見る農業気象木でもある。調査地域では16種類の堂木が232集落、266カ所¹¹⁾で堂木数の多い順にケヤキ、松、エノキ、アカシデ、エンジュ、銀杏のように分布している。これらは一本または数本で構成されている(表1、2)。

2) 長生(ザンスン) (図3)

長生は柱のような木または石に人の顔を彫刻したものであり、集

図2 蔚山郡の祭祀空間の分布

落の入口にたてられ集落間の境界を示すことが多い。調査地域では5集落において長生が祭祀空間として存在している。その方向は東向が4例、南向が1例である。

3) 祭堂 (ゼダン) (図4)

祭堂は1間×1間を基本単位として瓦屋根、土壁、木製の扉で構成されたのが伝統の様式であり、普遍的なものであった。しかし、現在は地域、建立時期、集落の財政状況などにより、材料、形態の違いがみられる。調査地域では183の集落に209の祭堂がある。まず、祭堂の向きをみると、南向が最も多く、次は南東向、東向、南西向の順となっている(表2)。このように南向きが多いのは、祭堂の方向が集落の民家の方向と同じものが多いためであると考えられる。つまり、集落が南側の斜面に南を向いて位置することが多いため、祭堂も同じ向きになることが多い。他の集落では違う向きもあらわれるが、南方向を含むのが殆どである。

祭堂の構造としては木構造、組積造、R・C造がある。祭堂の中で最も多くみられる組積造は132例の内、ブロック造が115例、レンガ造8例、石造9例である。木構造は71例がみられるが、これ

	I型	II型	III型	IV型	V型	VI型
堂木	●	●		●	●	
堂木群	●	●		●	●	
祭堂		●	●	●		
附属舎				●	●	
その他						●

図3 ザンスンのスケッチ (彦陽邑東部里集落)

図4 祭堂のスケッチ (青良面盤亭里集落)

は古いタイプであることから建て替えの度にその数が減っていく傾向にある¹²⁾。このことは、建て替えの時に前と同じ構造にするのではなく、その時期に一般的に建てられている構造を取り入れる傾向を示し、興味深い。このような現象は構造だけではなく、材料にも同じことがみられる(表3)。

祭堂の屋根は瓦の寄棟形式が最も多くみられる。セメント、石などが主な材料である祭堂の屋根の場合はフラットがほとんどである。壁の材料はコンクリートブロック、土壁、レンガなどである。祭堂の

図5 I型祭祀空間 (三同面上鶴集落)

表2 祭祀空間の構成要素

			I 型	Ⅱ 型	Ⅲ 型	Ⅳ 型	V 型	Ⅵ 型
			66事例	183事例	18事例	8事例	3事例	10事例*
堂 木	種 類	松	12	63		6		
		ケヤキ	30	73				6*
		エノキ	17	24		1	3	
		その他	7	23		1		
	個 数	1	60	120		7	2	1*
		2	2	21				4*
		3	1	4			1	0
		多	3	38		1		1*
祭 堂 の 向 き	東		16	3	2		4**	
	西		13	1				
	南		82	10	6		1**	
	北		10	1				
	南東		32	2				
	北東		7	1				
	北西		5					
塀の有無	有	2	79	10	5	2	0	
	無	64	104	8	3	1	10	
ひろばの有無	有	44	114	5	6	3	8	
	無	22	69	13	2	0	2	
大門の有無 (門扉)	有	0	42	2	3	2	2	
	無	66	141	16	5	1	8	

* 長生、石積、岩でできた祭祀空間。この内の6例には堂木も存在する。

**長生の向きである

門扉は木造、形式は両開きが多い。また、3例だけであるが、引き戸もみられる。祭堂を囲む塀は94の祭堂でコンクリートブロック、石でできたものがみられる。そして、その塀に門¹³⁾が設けられているのは52例あり、材料は鉄、トタン、木、アルミなどとなっている。

以上のように祭堂は、材料、形式などが異なるが、行政単位である面ごと¹⁴⁾の違いはそれほどみられない(表3)。このことから祭堂は地域的に決まった形式があるのではなく、集落の事情及び時代の変化により変わっていくものであることが分かる。

4) 附属舎

附属舎は祭祀用の食器などを保管したり、供えものの調理をする機能を持つ建物である。附属舎を持っている祭祀空間は11例であり、邑・面別には温山邑、西生面、斗東面、斗西面にそれぞれ2、6、1、2例がみられる。この11例を除いた集落では祭祀の準備または収納はセマウル会館、有司の家などを利用している¹⁵⁾。

5) 岩または石積み

石積みで構成されている祭祀空間の名称はソナンダンであるが¹⁶⁾調査地域ではソナムスプ(アカシデの森)とよばれていた。また海岸に面している大きい岩が祭祀空間として機能する例も1例みられた。

4. 祭祀空間の構成要素から見た集落の特徴

(1) 祭祀空間の類型別特徴(表2)

分類Ⅰ型は全体の23%、66例がみられた。その内、堂木一本で構成されたものが大半で60例がみられた。堂木が立地しているまわりに塀が設けられているのは2例だけであり、それ以外には開放的に使われていた。また、その中で広場もいっしょに存在するもの

が44例みられた。

分類Ⅱ型は63%、183例があり、この地域では最も一般的なタイプである。しかし、この調査結果と先行調査の結果¹⁷⁾とは違いがみられた。先行調査で、蔚山地域が属している慶南には分類Ⅱ型は一つも存在しないと報告されている。しかし蔚山地域だけでも183例がみられることからその調査結果に問題があることがわかった。もちろん、調査の時期が1969年であり、蔚山地域で確認できた183例はそれ以降に建てられたことも考えられるが、本研究の聞き取り調査からそのようなことはないことがわかった。

これら183例の祭堂の中、回りに広場をもうけ、住民の集まりなどに使われているのは114例がみられた。また、祭堂を囲む塀があるのは79例、大門があるのは42例である。

分類Ⅲ型は7%、18例がある。その内、塀があるのが10例、大門もあるのが2例であり、5例が広場を設けている。堂木がなく、祭堂のみになっているこのタイプの発生背景をみると次の二つが考えられる。まず、堂木はあったものの、それが枯れてしまった場合と祭堂を新しいところに新築するときに建物だけを建てて堂木は移植しなかったことである。

分類Ⅳ型は2%、8例がある。Ⅱ型に附属舎があるこのタイプには塀があるのが5例、大門があるのが3例、広場があるのが6例である。

分類Ⅴ型は1%、3例がある。その中、2例が塀と大門がある。広場は3例ともにある。

分類Ⅵ型は堂木、祭堂以外のものが祭祀空間として機能するもので、長生、石積み、岩などで構成され、全体の4%、10例がある。その内に長生が5例あり、堂木もいっしょにある。向きは東向4例、南

表3 調査地域別祭堂の構造

			凡西面	清良面	彦陽邑	江東面	農所邑	溫山邑	溫陽面	上北面	三同面	三南面	西生面	斗東面	斗西面	熊村面	計
構造	組積造	ブロック	12	9	12	8	11	10	10	13	1	5	10	3	3	8	115
		レンガ		1		2		1				1	1			2	8
	石								2				6			1	9
	木造	5	9	6	7	10	2	12	1	3	2	3				11	71
	R.C 造				3		1		1							1	6
屋根	材料	瓦	14	16	9	12	14	9	16	5	3	4	15	1		17	135
		本瓦		2	4	4	1	2	1	2		1	2			4	23
		スレート	1		5	1		1	2	2	1	1	1	2	1	1	19
		コンクリート	2	1		3	6	2	3	8		2			2	1	30
		石											2				2
	型式	入母屋	1	3	2	2	1	3	3	1		1	10			1	28
		寄棟	9	14	7	5	11	6	14	3		3	10	1		16	99
		切妻	5	1	9	10	3	3	2	6	3	2		1	1	5	51
		その他	2	1		3	6	2	3	7	1	2	0	1	2	1	31
		土壁	4	8	4	7	8	2	10	1	3	2	1			11	61
壁	コンクリートブロック	12	9	13	11	13	10	12	13	1	5	10	3	3	9	124	
	レンガ		1		2		2		1		1	3			2	12	
	石	1							2			6			1	10	
	その他		1	1												2	
	門扉	材料	木	5	14	9	5	10	7	8	2	3		6	1		15
アルミ			4	3	1	4	3	5	3			3	4			4	34
トタン			8	1	6	10	7	2	11	13	1	2	9	2	3	3	78
鐵				1	2	1	1		2			3	1			1	12
型式		雨開き	5	14	13	12	6**	8	17	8	3	6	17	1		19	129
		片開き	12	5	5	8	14	4*	5	9	1	2	3	2	3	4	77
塀	コンクリートブロック	3	8	3	15	12	7	10				1	10			6	75
	石	3	2	4	1	1		1	2	2			1			2	19
大門	鐵	4	4	3	5	4	2	4				1	5		4	1	37
	アルミ						1						1				2
	木	1	3													1	5
	トタン			4		4											8

* 引き戸 2 例は、表の数値には含まれていない

** 引き戸 1 例は、表の数値には含まれていない

向1例であり、広場を持っている。石積みでできている祭祀空間は2例あり、その内1例は堂木もいっしょにある。海辺の岩が祭祀空間になっているのが1例ある。また、碑石が祭祀空間になっている例も一つあるが、これは堂木が枯れた跡に立てたものである。そして、決まった場所がなく、毎年違う場所（山、野原、集落の広場など）が祭祀空間になる例も一例ある。

以上のように祭祀空間は6つのタイプに大別できるが、この調査地域では主に祭堂と堂木で構成されているのが最も一般的であることが分かった。

(2) 祭祀空間の類型と主な分布地域

祭祀空間の構成要素による類型を調査地域別にみると、Ⅰ型は三同面、斗東面、斗西面に多く分布している。この3つの地域は都市から離れた場所であり、農村と山村が共存する地域の特徴をもっている。祭祀空間の原型が樹木（神木）であること¹⁸⁾からすると、都市化が進んでいないこの地域では、祭祀空間の変化も少ないと考えられる。とりわけ、堂木のまわりに祭堂や附属舎を造るような祭祀空間の変化がこの地域ではあまり見あたらない。

Ⅱ型は江東面、熊村面、農所邑に多く分布している。この地域は都市近郊農村と都市近郊漁村地域である。都市近郊地域の集落は他の地域より都市化が進む一方、変化も多い。祭祀空間の変化も同じであり、Ⅰ型より新しいタイプのⅡ型がこの地域のほとんどの集落に分布している。また、この地域では建て替えも活発に行われ祭祀空間に多くの変化が見られる（このことについては別稿で論じる）。

Ⅲ型は温陽面、西生面に主にみられるが、この地域はⅡ型も多く見られているため、地域的な特徴はない。只、この二つの地域は隣接しており祭祀空間の形などが類似していることが指摘できる。

Ⅳ型、Ⅴ型、Ⅵ型は地域別の分布の差はみられない。

以上のように各邑・面の地域の特徴と集落の祭祀空間の類型との関係について考察したが、主にⅠ、Ⅱ型でその差がみられた。このことは祭祀空間の構成がⅠ、Ⅱ型が殆どであることと一致する。

5. 祭祀空間の有無と集落の特性

(1) 祭祀空間の有無

調査地域の289カ所の集落の中、254カ所の集落に祭祀空間

表4 地域別の集落数及び分類別祭祀空間数

調査地域	全体集落数	祭祀空間がある集落数	種類別祭祀空間数						
			Ⅰ型	Ⅱ型	Ⅲ型	Ⅳ型	Ⅴ型	Ⅵ型	計
凡西面	25	21	4	17					21
青良面	27	20	2	15	4				21
彦陽面	26	24	6	18				5	29
江東面	19	19		19	1			2	22
農所邑	20	18		20	1				21
温山邑	15	14	2	12	0	2		1	17
温陽面	21	18		16	6				22
上北面	20	20	10	17				1	28
三同面	15	15	14	4					18
三南面	22	13	6	8					14
西生面	22	21	1	10	4	6			21
斗東面	18	11	8	3			1		12
斗西面	17	17	13	3			2		18
熊村面	22	22		21	2			1	24
計	289	254	66 (23)	183 (63)	18 (7)	8 (2)	3 (1)	10 (4)	288 (100)

*()の中の数字は%

が存在し、集落の祭祀空間の存在比率は88%である。祭祀空間について初めて調査が行われた1936年の朝鮮総督府の調査記録を見ると、当時この地域の集落に対する祭祀空間の存在比率は70%であった。そのことから見ると時代が下がることによって祭祀空間増加を示していることがわかる¹⁹⁾。

集落における祭祀空間の数をみると288カ所であり、これは集落の数を上回っている（表4）。このことは一つの集落に必ずしも一つの祭祀空間が存在するものではないことを示している。これは二つの原因によるものと考えられる。まず第1に、規模が大きい集落²⁰⁾にはそれぞれ通称上堂、下堂と呼ばれる祭堂が二つ存在する²¹⁾。この場合、上堂は集落の小丘または東山に位置し、下堂は集落の入口または耕作地近辺に位置していることが多い。第2の原因として考えられるのは、集落の行政区域改編である。その改編で割合規模が小さい集落幾つかを一つの集落にしたことである。この行政区域改編は植民地時代である1914年に全国的規模で行われ、現在に至っている。このことが祭祀空間の数に変化をもたらしたも

図6 Ⅱ型祭祀空間（熊村面五福集落）

図7 Ⅲ型祭祀空間（温陽面東上里下西集落）

のと推測できる。

以上の二つの理由から見ると、この調査地域では第二の原因によって集落に一つ以上の祭祀空間が存在するようになったと思われる。その理由としては二つがあげられる。まずこの地域で、一つの集落に二つの祭堂がある場合の祭堂に対する呼び方をみると、上堂または下堂という概念はないことが分かった。もう一つは、集落の単位であって、行政区域名としても住民の認識としても同じ集落でありながらも、集落の内に一つ以上の別の集落名が存在して混用されていることである。祭祀空間が二つある23カ所の集落には二つの集落名が、三つある4カ所の集落には三つの集落名が、四つある1カ所の集落には四つの集落名が存在し使われていたのである²²⁾。しかし、二つ以上の祭祀空間があり、集落名も二つ以上使われている集落の場合も祭祀空間での祭り、または日常的な利用については区別しない。このことから集落名や祭祀空間が二つ以上ある場合でも住民は同じ集落として認識していることが分かる。

調査地域で祭祀空間が現在存在しない集落は全体289カ所の集落のうち35カ所である。この内、集落の発生時から祭祀空間が全くなかった集落が19カ所、元々は祭祀空間があったが近年になってなくなった集落が16カ所あった。この35カ所の集落に祭祀空間が存在しない理由を明らかにした結果、集落の性格の違いが原因と考えられる。

1) 祭祀空間の存在しない集落

集落の発生時から今日に至るまで祭祀空間がまったく存在しなかった集落はその性格によって原因を探ることができた。祭祀空間がない調査集落を見ると院集落（官営宿泊施設として形成された集落）²³⁾、市場として形成された集落、新しく開発された集落に大きく分けられる。これらの集落の性格が祭祀空間の存在に影響を及ぼした。

①院集落（官営宿泊施設の集落）

国によってつくられた官営宿泊施設の集落には祭祀空間が存在していない（温陽面院洞集落）。祭祀空間は集落民の安全と集落の内外の秩序に関わる空間であることから普通の集落には存在していた。しかし、このように宿泊を目的とする特別な集落には祭祀空間をつくる必要がなかったものと考えられる。

図9 V型祭祀空間（斗西面大亭集落）

図8 IV型祭祀空間（西生面鎮下集落）

図10 VI型祭祀空間（彦陽面東部里集落）

②市場集落

集落全体が市場としてできたところには祭祀空間が存在していない。昔ながらの市場は五日ごとに開かれ、売る人も買う人も近辺の住民または市場ばかりを巡回する商人であることから祭祀空間はつくらなかったものと思われる。その理由として考えられるのは近辺の住民も商人も自分らの集落に祭祀空間を持っていたからである。市場が開かれない日にちに市場村で暮らしている住民は宿泊施設または酒屋を運営するわずかな人であった。そのような背景から生まれた集落には今も祭祀空間はない。

③新しい集落

1945年以降、1990年以前に新しく開発された集落には祭祀空間が存在しない。祭祀空間は住民自らが歴史とともに造り上げてきたものであり、そこに属する集落住民は同質性をもつ特性がある。しかし、国によって開発された集落に住んでいる集落民はそのような同質性を持ってない。また、開発した時に祭祀空間用の敷地が計画されなかったのも一つの理由になるものと思われる。

2) 祭祀空間が消滅した集落

調査集落16カ所での祭祀空間の消滅の理由としては公共事業、戦争、行政区域改編、自然災害、宗教などがあげられる。

①公共事業

公共事業は新しい村づくり運動であるセマウル運動と集落の集会所建設とに大別できる。そのなかでもセマウル運動²⁴⁾による祭祀空間の消滅の例が9カ所でもっとも多い。この運動の一環として行われた集落道整備、橋の建設などによって祭祀空間の敷地が犠牲になったのである。このように犠牲になった祭祀空間が位置していた敷地は、公共敷地または河川敷地が多かった。そのため住民の意見などは通らず、祭祀空間がなくなったのである。このことは行政と住民の祭祀空間に対する認識不足によるものと思われる。当時の政府は古いものは良くないものであるという考え方を住民に押しつけ、伝統性ある祭祀空間が消失されたと考えられる。また、近年になって、祭祀空間がなくなった集落が1カ所ある。1993年に集落の集会所であるマウル会館を建てるときであり、集落には堂木で構成された祭祀空間があったが、敷地確保のために祭祀空間をなくしたのである²⁵⁾。

②戦争

戦争によるものとしては堂木の被害があげられる。例は多くないが朝鮮動乱の時に爆撃によって祭祀空間がなくなり、その後復元しないまま今日に至っている例が2カ所ある。

③行政区域改編

植民地時代に行われた行政区域改編の時には、規模が小さい集落いくつかを一つの大きな集落にした結果、一つの集落に祭祀空間が二つ以上になったが、近年にはこれと反対の動きもある。つまり、大きい集落を二つに分けることによって祭祀空間の数を少なくしたり、なくしたり例が2カ所ある。

④自然災害

自然災害による祭祀空間の消失は台風によるものがほとんどである。この場合も堂木だけで構成されている祭祀空間の被害例で、2カ所ある。

⑤宗教

宗教によるものとしては、集落の住民にキリスト教を信じる信者

の数が増えたことで祭祀空間をなくした例であり、1例ある。

6. まとめ

以上のことから本研究は次のようにまとめることができる。

(1) 韓国の伝統的な農村集落、特に蔚山郡の集落には住民の求心点である祭祀空間が存在し、機能している。

(2) 祭祀空間は、主に堂木、祭堂で構成されているが、それ以外にも長生、岩及び石積みもみられた。堂木は232集落の261カ所でケヤキ、松、エノキなどの老巨樹で構成されていた。祭堂は183集落に210カ所でみられた。祭堂の材料、形式などは建て替えの度に新しく変化し、集落による違いがみられる。

(3) 祭祀空間はその構成要素から6つのタイプに分類できた。その中、堂木及び堂木群で構成されているⅠ型が23%、堂木及び堂木群・祭堂で構成されたⅡ型が63%であり、この2つのタイプが蔚山地域の一般的な祭祀空間であることが分かった。

(4) その類型別の地域の特徴が見られた。とりわけ、地理的に都市部に遠いほど祭祀空間の原型が残されていた。このことは、祭祀空間の原型であるⅠ型が都市部から離れ、集落の変化も少ない地域に最も多いことを意味する。また、堂木に祭堂が加わったⅡ型は都市部に近い地域に普遍的に存在する分布の特徴がみられた。

(5) 集落での祭祀空間の有無は集落の性格に大きく関係している。つまり、祭祀空間は調査地域の農村集落には一般的に存在していて、これがない集落とはその性格の差が大きい。祭祀空間の存在しない集落としては院集落、市場集落、戦後の新しい集落などが確認できた。

(6) 祭祀空間の消滅している例がわずかながらみられた。その理由について考察した結果、公共事業によるものが最も多くみられた。このことは行政の祭祀空間に対する認識不足をあらわしているものと考えられる。

注及び引用文献

(1) 韓国の集落には“洞祭”という村単位で行われる祭祀がある。この祭祀は豊年と集落の安全、住民の健康などを目的として毎年陰暦1月15日に行われる。祭祀は供えものを住民が供え、祭祀空間でおじぎをした後、供えものをみんなで食べながら交流を深めるものである。祭祀の名称は地域によって異なるが内容的な面では共通点が多い。

(2) 農民がドレという生産共同体によって農作業をおこなう時の音楽である。広い意味ではケンガリ、ジン、ザング、太鼓などの打楽器を演奏しながら行進、儀式、労働をする音楽のことである。

(3) 村山智順著、『朝鮮の部落祭』（朝鮮総督府、1937年発行）

(4) 祭祀空間の構成要素。本文の祭祀空間の定義のところで説明した。

(5) 祭祀空間に関する文献上の記録は三国史記、三国遺事などの古文書に見られるが、今日と同じものであるかどうかは分からない。そして祭祀空間に関する調査報告は植民地時代の文献が最初である。韓半島全地域の集落の祭祀について調査した1937年朝鮮総督府発行の「朝鮮の部落祭」がそれである。また、韓国全地域の農村を調査したのが1993年日本建築学会大会で報告されている。斎木崇人、共生と現代—東アジア集住文化を通過するもの—「韓国の堂木と集落の空間構成」。しかし、韓国全地域の調査でありながら集落の数は131カ所に留まっている。

(6) 韓国の行政区域は大きく都市と農村とに分ける。都市と農村を含む大

さい単位として道があり、続いて都市部を市、区、洞に、農村部を郡、邑、面、里、マウルに分類する。

(7) 蔚山市は1995年に蔚山郡を蔚山区域に併合し蔚山通合市に昇格した。そのことによって蔚山郡は蔚山市の一つの区すなわち、蔚山区へと行政名が変わった。また、蔚山市は1997年7月に蔚山広域市に昇格した。このことによって蔚山区の一部地域は蔚山市の北区になり、残りは再び蔚州郡となった。しかし、このような行政名の変化は形としての問題であり、その中の生活の変化はすぐに現れないものである。それで本研究では1994年12月現在の名称を使うことにした。

(8) ダンスナムは、ダン(堂)+ス(樹)+ナム(木)のことである。韓国の集落の入口または集落の中心部には大体大きな樹木があり、機能によりダンスナムとゾンザナム(亭子木)に分けられる。樹木の日常的な利用は二つ共に同じであるが、非日常的な利用によって区別できる。つまり、集落の祭祀である洞祭を行うかどうかによる。祭祀を行う方がダンスナムであり、行わない方がゾンザナムである。

(9) ザンスン(長生)は木または石でできた柱模様の上の部分に神または将軍の顔を彫り、下の部分には役割を示す文字を書いて道ばたにたてるものである。

(10) ゼダン(祭堂)は洞祭をまつる場所である。祭堂にまつられた神の性格によって山神堂、ソナン堂、ゴルメギ堂などに呼ばれるが調査地域では“祭堂”が一般的な名称である。

(11) 一つの集落に祭祀空間が二つ以上あるのが30事例があるため集落の数と祭祀空間の数異なる。また、堂木の所在する箇所は表2のI型、II型、IV型、V型の事例数とVI型の内、堂木のある6事例を合わせて266とする。

(12) 祭堂の建て替えは決まった期間または時期があるのではなく、集落の財政が良くなり、祭堂がふるくなったら建て替えをするのである。全集落に祭堂がある熊村面(22集落に24の祭祀空間があり、その中で祭堂があるのは23ヶ所)の場合、1998年に入ってから4つの集落で建て替えが行われた。建て替えの際に木構造が組積造に変わった。

(13) 韓国ではこのような塀にある門を大門と呼ぶ。

(14) 面には生活基盤である5日市場がひとつあり、面役場がある単位であることから面に属している各々の集落住民の生活ぶりなどがよく似ている。

(15) セマウル会館は集落の集会所であるが集落共同のものの収納空間としても利用されている。また、有司は集落の祭祀を担当する人のことであり、そのひとの家に祭祀用のものが収納されている場合もある(このことについては別稿で論じる)。

(16) ソナンドンの分布を全国的にみると、堂木形態の次に多いのが石積み、その次が石積み+堂木の形態である(文化財管理局、部落祭堂、1969)。

(17) この調査は文化財管理局が1969年に行ったものであるが、それによると、慶南の祭祀空間の分布は次の通りである。(文化財管理局、全掲書、PP. 18~28)

石積み(333)、堂木(1041)、堂木+石積み(443)

(18) 韓国が一番古い神話である檀君神話に神壇樹という神木(堂木)がでてくる。檀君は韓国民族を創り出した人物であり、その時から神木信仰があったと思われる。そのことから堂木だけで構成されている祭祀空間が原型だと考えられる。

(19) この時の調査報告書は祭祀空間の数と集落の数については書いていない。存在比率だけ書いてあるため、同じ地域での調査であるが漏れがあっ

たかどうかはわからない。調査漏れがなかったとすれば祭祀空間はその後、増えていると思われる。

(20) 韓国の集落の規模は10戸以内のものから200戸以上のものまで様々であるが普通は50戸前後が多い。規模が小さいというのは大凡30戸以内であり、大きい規模というのは100戸以上である。

(21) 「朝鮮の聚落の場所論的構造—河回マウルの場合—」, 西垣 安比古, 『年報朝鮮学』, 1994年

(22) 例えば祭祀空間が二つある石川マウルには石川と石溪という二つの集落名がある。また四つある盤谷マウルには銀洞, 高下, 玉洞, 真玄という四つの集落名がある。

(23) 院集落とは高麗時代から強化された中央集権制度により、首都と地方を結ぶ主要街道に沿って発達した宿泊と交通を中心にして形成された集落のことである。とりわけ、駅に近接して位置し、共用旅行者の宿食提供と賓客の接待をする客舎中心の集落である。このような集落は近代に入って政治、社会制度の変革および交通革命で殆どなくなった。

(24) この運動は、韓国の産業化が始まって間もない頃にあたる1970年に始まった新しい村づくり運動である。

(25) この集落では最初は堂木を移植するつもりであったが、敷地確保が難しく、移植ができないまま祭祀空間がなくなってしまった。調査の時、住民の意見は敷地が確保できる次第祭祀空間をつくりたいとのことであった。

(1998年9月9日原稿受理, 1999年5月24日採用決定)